
【別世界】アナザーワールド

TINORI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【別世界】アナザーワールド

【ZINE】

Z8518Z

【作者名】

TIZORI

【あらすじ】

朝日が俺の目に差し掛かる。
俺は眩しさにより目を覚ます。

そこは、知らない家だった。

「気が付いたんですね」

女の子が俺に話しかける。

「ここは？」

俺は辺りを見渡す。普通の木製の家のよつて思える。

「私の家です」

「ところで、何故貴方は学校の校庭の真ん中で倒れていたのですか？」

「え！？」

俺は驚いた。

俺はさつきまである商店街にいたのだ。

それなのに校庭の真ん中で倒れていたのかが自分でも解らなかつた。

俺はもう一度今日の放課後のこと思い出す。

人生の分岐点（前書き）

以前もこのサイトで小説を書いてましたが、過去の作品をすべて消しての新スタートを切りました。
どうぞ、楽しんで読んでください。

人生の分岐点

人生には分岐点が存在する。この街にいた俺も分岐点に出会った。此処は、きっと貴方もよく知っているであろう街、カッブルやら主婦等が楽しそうに日々を送る街だ。

そんな街に俺、柏木俊介かしわぎしゅんすけは住んでいる。

俺のことを簡単に紹介するとすれば、高校生になる前に両親が他界してしまったので、

祖父に引き取られて、高校の寮に住んでいるだけの変哲もなにもない残念な高校生だ。

「しゅん。さつさと行こうぜ！俺、店で並ぶのは嫌だからな」

突如俺に一人の男子生徒が話しかけてきた。

その男子生徒の名は天ヶ瀬達也あまがせたつや。

俺の同級生で学校の寮の隣の部屋だ。

「はいはい。今行きますよ。」

そういうて俺は達也と一緒にある場所を目指す。

只今俺は達也が学校帰りと一緒に寄りたい店があるとかでそれに付き合っている。

もちろん。達也が連れて行く店の場所を俺は知らない。

「それにして、1ヶ月の終わりにもなれば寒くなるな」

俺はそういうて左手の腕時計を見た。現在時刻は16時48分。

何故携帯電話があるのに腕時計を見るのか最初は皆疑問に思つていたけど、理由は簡単。

俺の死んだ親父の形見だからだ。

死んで半年と少し経つた今でも両親のことは覚えてる・・・・む

しろ仮に半年程で忘れていたらそれは人としてどうなんだ？

そんなことを考える俺の横で達也が「何行ってんだよ」と馬鹿にした風に言つ。

それから暫く歩いて不意に達也が立ち止まる。

「着いたぜ、しゅん

俺は達也の指差すほうを見る。

ぼろつちい占い屋だつた。

「・・・・・」

俺は暫く開いた口が戻らなかつた。

「よかつた。まだ人が並んでなくて」

「おい、た・つ・や・君？」

（何だよ）。俺はさつさと占つて欲しいんだから話かけんなよ～

俺は少々イラつと来たが、落ち付いて達也に話す。

「お前、何が「俺、店で並ぶのは嫌だからな～」だよーこんな廃れた占い屋にお前みたいな奴以外に誰が並ぶのかを俺に教えてくれよー！」

俺が達也に文句を言った瞬間。

「廃れた店で悪かつたわね！」

ガン！と気持ちのいい音が俺の頭の上で鳴つた。

「いつてええええええええええ！」

俺は痛む頭を擦りながら俺の頭に拳を叩き込んできた女性に叫ぶ。

「いきなり初対面の人の頭を殴る奴がいるのかよ！」

俺がそう叫ぶと、

「ハイハ～イ　こつこにいま～す」

などとふざけた調子で答える女性が一人。

俺は自分の顔が怒りで引きつっているのが解つた。

しかし、この占い師の女性、よく見ると。

「・・・・・H口い・・」

そう、H口いのだー！

胸なんか爆乳だし、腰もキュウと引き締まつて、尻もデカイし、

完璧なプロモーションを持つ二十歳前後のおそらく性格が残念そうな（俺の主觀で）占い師がいる。

一人で勝手に物々喋る俺のことをほつたらかしにして達也が占い師

に話しかける。

「すいません。俺たちのことを占つてください」

「コニコ笑顔で話しかける達也に対して。

「嫌です」

こちらも「コニコ笑顔で却下したあああああーー！」

「私、災難が起きそうな人しか占わないんです」

・・・・何故だろう、彼女の語尾の「」が激しくムカついている

俺がいる。

エロい体を持ち、語尾がやけに、おそらく俺だけがムカついてるの
であろう占い師に占つて貰う為に粘り続ける達也。

すると、急に占い師が俺の方を向いて一言。

「貴方、もうすぐ死ぬわね」

「・・・・え？」

これには俺も達也もびっくりした。

仮にこの言葉を俺に言つとしてもこんな感じの筈だと俺は思つていた。

例えば「えっとお、貴方、もうすぐ死ぬわよ」みたいな感じだと
思つていたら、

急に真面目に喋りだしたのだ。

「あの～もう少し詳しく聞かせてくれませんか？」

俺の発言に對して占い師は頷いて話す。

「貴方は今から一時間後にトラックに跳ねられて死ぬのよ」

俺は腕時計に視線を落とす。

現在時刻は17時23分。

つまり、俺は今日の18時23分頃にトラックに跳ねられて死ぬらしい。

「おおおー・・・そんなの信じられるかよ・・・」

顔がさつきのような怒りではなく恐怖によつて引きつる。

「・・・残念だけどこれは事実よ。・・・受け止めなさい」

俺は無意識に後ずさる。

次の瞬間、俺は急にパ一くつて（はつきりとは覚えてないが恐らく怯えていたんだと思う）占い師と達也の目の前から全力ダッシュで消えさせた。

「ハア・・ハア・・・・ハア・・・

俺は走つて占い師と達也のいるところから逃げた。

今は自販機に手を突いて休んでいる。

半年前に両親を亡くした俺は無意識の「しぐこ」死」というものが恐ろしく怖いものに変わっていた。

現在時刻は18時00分。

商店街に音楽が流れた。

俺は堪らなく怖かった。

死ぬのが怖くて仕方がなかつた。

あの占い師の前にいたら今すぐにでも死にそうな感じがした。

そういうえば、達也を置いてきたまんまだつたな。

もう少し落ち着いたらメールでもして謝ろう。

そう思つていた俺の携帯に電話が掛かってきた。

「・・・もしもし」

俺は電話に出た。知らない番号だつたが出てみることにしたんだ。

『あつ俊介！俺！竜。宮崎竜だよ』

「竜・・・か」

竜とは俺の従兄弟である。

正直最後にあつたのがいつかも覚えてないので、顔も声も覚えてなかつたので解らなかつた。

「どうしたんだよ、急に

『いや、実はさ・・・』

?どうにもおかしい俺の記憶じやあ竜はハツキリと物を言つタイプの人間だ。

歯切れの悪いのが俺には不思議に思えた。

『お前や、昔、爺様が俺たちに話した「魔法の世界」の話を覚えてるか?』

「魔法の世界」の話?確かにそんなことを話されたのは何となくだが覚えている。

「確かに、戦争中に飛行機で飛んでたら「魔法の世界」に少しだけ行つたとかそんな話だつけ?」

『ああ。俺、実ザザを、そのザザザとにザザいてザザ様らザ絡が・・・』

急に電波が悪くなつたのか?ノイズが混じりだした。

「おい!竜!何かあつたのか?」

俺は電話に向かつて叫ぶ。

『女の子には気をつけろ・・ガチャ』

ツーツーと機械音が電話から聞こえる。

『女の子に気をつける?』

もしかして、占い師のことなのか?

でも、何で竜がそんな事を?

『キヤー!!』

突然悲鳴が聞こえた。

俺は声のしたほうに振り返る。

すると、そこにはある光景があつた。

母親らしき人物が娘を抱っこしていくときにこけたのだろう。それだけならよかつた。

しかし、事はもっと悪い方向に進んでいた。

抱かれていた娘が道路にまで転がつている。

『どんなこけかたらあんなんになるんだよ!』

俺は叫びながら女の子を助けようと道路に飛び出す。

その時、クラクションが鳴つた。それも、トラックの。

俺はトラックのほうを見た。そして、その奥に見える商店街の時計も見えた。

時計の時刻は18時23分。

そのとき、占い師の言葉が俺の脳裏を駆け巡る。

『貴方は今から一時間後にトラックに跳ねられて死ぬのよ

そして、竜の言っていた事。

『女の子に気をつけろ』

俺は女の子を占い師だと思つていた。

けど、違つた。

次の瞬間俺の目の前は真っ暗になつた

人生の分岐点（後書き）

今回はあらすじの回想ですのであまりファンタジーはありませんし、
今後も王道展開になります。ww
それでもいいなら続きを読んでくれることを祈っています

新世界（前書き）

「」からはありますじの後の話になります。

俺、柏木俊介は確かに今日の放課後は天ヶ瀬達也と一緒に俺が一時間後に死ぬと言つてきた占い師の所に行つて怖くなり占い師と達也の所から逃げた。

その後は街の商店街の大道理の向かいにある自販機で休憩してたら昔会つた従兄弟の宮崎竜から電話が掛かってきた。

その後は悲鳴が聞こえて俺が振り返つたら女の子が道路にいた。それで俺は道路に出た瞬間にトラックに轢かれたはずだ。

それなのに現在、俺は見知らぬ少女の家のベッドで寝いた。

しかも、その少女が言つには俺は学校の校庭で倒れていたらしい。

「確か・・・竜は」

俺は最後に話していた竜との電話の内容を思い出す。

「爺さんの行つた『魔法の世界』の事と女の子に気をつけろって・・・」

その言葉の意味の『女の子に気をつけろ』は解つた。

でも、爺さんの『魔法の世界』がどうしても理解できなかつた。

「いや、そんなことよりもさつさと寮に帰つて達也に謝ろう」

俺は上半身だけを起こして体を動かしてベッドから立ち上がろうとした。

「！？・・・何だ？」

おかしい。さつきまで動けそうだったのにいざ、立ち上がろうすれば急に体に力が入らなくなつたのだ。

ガクツと足の力が抜けて俺は床に倒れこんだ。

「大丈夫ですか！？」

多分、俺の看病をしてくれているのであるう少女が俺を立ち上がらせてくれた。

そして、俺を静かにベッドに寝かせる。

「まだ動いてはダメなんですよ。姉さんの治癒魔法で完全に治つて

ないんですから」「ひ

その少女の発言に俺は何らかの違和感を感じた。

しかし、少女はそんな俺のことは気にもせず話を続ける。

「びっくりしたんですよ。放課後の校庭に先生が集まっていたんですけどから」

どうやら俺が倒れていたときのことを話しているようだ。

「それなら何故、先生ではなく君の家で俺は休んでいたんだ?」「

そう、俺はここでも疑問に思った。

おそらく俺は彼女の学校の校庭で倒れていたのだろう。（何故校庭で倒れていたのは置いといてだ）

しかし、此処で疑問が生まれる。

何故教師ではなく生徒が俺の看病をしているのかだ。

でも、大よその想像は付く。

彼女が生徒なのは殆ど間違いないだろう。

黒髪のショートヘアで身長は俺の肩ほどのところに頭があつたので女子の平均ぐらいだろう。

歳も多分同じだと俺は予想する。

なので、彼女ではなく彼女の話に出てきた姉が教師か何かなのだろうと俺は予想する。

と、そこでドアが開いて女性が入ってくる。

「お、気が付いたみたいだね」

俺の看病をしてくれた少女に似ている女性が入って早々に俺に話しかける。

黒髪は腰のところまで伸び、黄色いシャツのようなものを着ており、ジーンズに似ているズボンを履き、白いエプロンをしている。

俺には女性の着ている服が俺の知っている服に似ているのは間違いないのだが、何処か違う気がする。

俺の視線に気づいたのか、女性は俺に質問をする。

「さつてと、教師として不法侵入者の君に質問したいけど・・・喋れる?」

俺は此処でどんな返答をすれば最良の選択かを考える。

しかし、仮に今答えなくてもいいつかは答えなければならぬ。だつたらさつと答えてしまおつと俺は決めた。

「大丈夫です。喋れます」

女性は俺の言葉を聞くと笑つた。

「良かった。私の見込みじやあ後半日は喋れないと思つてたけど。いやいや君の回復力はずいぶん高いんだね」

女性は俺がまだ喋れないと思つて質問しても言いかと尋ねてきたのだ。だつたら、後半日待てよ！

俺は心の中で女性にツッコミをこれる。

「じゃあ、質問。」

そこで女性は言葉を区切り、こよこよ『質問』・・・といつより寧ろ俺にとつては『尋問』が始まる。

「あーそうそう。言い忘れてたけど、このじんも『フツツ！』『フツツ！』んん！ごめんなさいね。最近風邪気味なのよ、勘弁してね。」

今この人『質問』じゃなくて『尋問』つて言つたぞおい！..

どうやら女性はこの『質問』とこいつの『尋問』を録音するらしく。

しかし、俺はそこで疑問が生れた。

普通録音する際にはテープレコーダーとかを使うのだが、この女性の周りにあるのは紙と羽ペンのみ。

しかし、このことに疑問を持つてるのは俺だけのようだ、少女は普通にしている。

困惑する俺を無視して女性は質問をする。

「まず第一の質問。君は何故校庭に倒れていたの？」

女性が喋つたとたん俺は自分の目を疑つた。

何と、羽ペンと紙が宙に浮き、見たこともない字を書いているのだ。これのどこが録音なのか少々どころか大いに理解できないぞこれ！いや、それ以前に物理の法則とかいろいろ無視してるぞこれは。しかし、そんな不可解なことを無視して（無視していないとやってられない）俺は質問の返答をする。

質問は大体10分程度で終わった。

おそらく少女も女性も俺の話を信じないだろ？

彼女たちはトラックや商店街という物を知らないような雰囲気を出していたからだ。

「私は学校にこの録音したものを持つていくわ」

そこで区切り、女性は俺の方を見つめながら言ひ。

「1時間後に学校に来なさい。そこで貴方の魔法の特性を調べるから」

女性はさうに俺の横にいる少女に「エリア。彼を案内してあげて」と言つた。

どうやら俺の看病をしてくれた少女の名はエリアと名前のようにだ。しかし、俺は気になる。

魔法の特性を調べる？

そこで俺はエリアという少女に聞いてみることにした。

「あの、魔法の特性って？」

少女は答える。

「魔法の特性とは、その人がどんな魔法を得意なのかを調べるんです。ちなみに私は氷と水の特性を持つています」

俺は魔法という単語に対して不思議と違和感を感じなかつた。

普通の人は魔法と聞いて馬鹿馬鹿しいとか、そんな非科学的なことなどと切り捨てるだろう。

でも、俺は違和感を感じるのではなく、寧ろ懐かしい響きを感じた。俺はエリアに魔法について様々な質問をした。

どうやって使うのか、どんな魔法の種類があるのか、誰にでも使える物なのかどうか。

俺は知らないうちにこの世界は別の世界なんだと感じていたし、帰れないことも感じていた。

だからこそ俺はエリアに魔法のことを聞いていたんだと思つ。

「あ、そろそろ学校に行きましょ？」

どうやら学校に行って魔性の特性の検査をするらしい。

俺はエリアの後ろについて木製の家を出る。いつの間にか俺は歩けるようになつていた。

なるほど、俺の回復力は本当に高いようだ。

「ここからは森の中を行くので離れないでください」「了解」

そう言って俺はエリアの後に続いて歩き始めた。

俺がこの別世界に来たときに最初にいた場所に向かつて。

俺、柏木俊介はトラックに轢かれたら魔法の世界にいました。

現在、俺を看病してくれていたエアリスという名前の黒髪のショートで俺が最初にこの世界に来たときに倒れていた学校の制服であると思われるものを着ている。

俺はエアリスの姉と思われる教師に学校にくるよう言われたのでエアリスが道案内をしてくれている。

俺とエアリスは森の中の道を延々と進んでいる。

唯、俺はエアリスにこの世界の歴史を聞いていた。

エアリスが言うことはこの世界は500年ほど前に大きな戦争が起きたらしいが、この世界を治めている【ティーオ国最連盟】（略してディオ連といふらしい）と反乱分子であった【エスペーロ】との戦争が有つたらしい。

しかし、ディオ連側に縁の竜を操り、右腕に魔の紋章を持つ勇者が現れ戦争に勝利したらしい。

俺はこのことを聞いてやつぱりどの世界にも戦争は起るんだなと思っていた。

20分程歩いたらどうか、何やら門らしきものが見えてきた。

「着きました。此処が魔法学園「ウイザード・魔法学園」です」

そういってエアリスは門の前で立ち止まり、バスガイドのお姉さんのような笑顔で話す。

どうやらこの学校は俺の世界での中高一貫の学校のようだ。

大きさは・・・・広すぎて見当がつかない。

俺とエアリスは門を潜り、^{くろ}学校の中に入る。

入つて校舎へと続いてるのであろう道がある。

俺とエアリスはその道を進んでいく。

ある程度進んでいたら急に俺の頭に妙な痛みが走る。

「・・・ツ！」

「大丈夫ですか？」

エアリスが心配そうに尋ねる。

何故だらう頭だけでなく右腕も痛み出してきた。

『聞こえますか？・・・私の声が、』

頭の中に女性の声が響く。これが俗に言つてレパシーってやつか？
頭が痛むんならあまり便利とはいえないな。

『聞こえていたのでしたら返事をしてください！』

また声が聞こえる。声が聞こえるたびに頭と右腕の痛みが増す。

「もうやめてくれ！・・・お前の声は聞こえてるから話しかけないで
くれッ！…」

俺は本気で叫んでいた。本気で叫ぶほどに頭痛が激しくなっている
し腕の痛みも信じられないほどに痛い。

『よかったです・・・お願ひです。今すぐ私の所に来てください！…』

もう限界だ。俺は痛みのせいで、そのばにうずくまる。

『貴方が私の所に来れるように記憶に道を残します。・・・・なる
べく早く私の居る遺跡まで来てください』

女性の声が聞こえなくなると同時に痛みが引いていった。

「大丈夫ですか？」

エアリスがまたも心配した声で尋ねる。

「ああ、大丈夫だ」

俺はよろよろと立ち上がり、エアリスに尋ねる。

「それよりも、この辺りに遺跡かそれっぽいものはないか？」

エアリスは暫く黙ると答えた。

「それならこの道を外れたところに戦争のときに勇者が最後に居た
といわれる遺跡があります」

その言葉を聴いた瞬間俺の記憶にある道に関する記憶が出てくる。

「解った。ありがとう」

俺は一目散に走り出す。

まだ本調子ではないのだろう、すぐに息が上がってしまい走れなく
なる。

それでも俺は遺跡に向かつて走る。

5分ほど走ると遺跡らしきものが見えてきた。

「これだ、あの声が言つてた遺跡」

それは本当に遺跡だつた。誰が見ても遺跡と答えるまでに遺跡の形をしていた。

俺は迷うことなく遺跡の階段を下りて、地下に向かつて記憶にある道を進んでいく。

すると、広い場所に出た。

真ん中には祭壇の様な台がある。

その代の中央にカプセルのようなものがあり、中に女性らしきものが入つていた。

中に入つている女性のよつた物が入つてるカプセルの下には何かの文字が書いてある。

俺はカプセルに近寄り、埃を被つた文字を見つめる。

「・・・これ、・・・日本語だ」

そう、文字は日本語でこう書かれていた。

『この世界に来るであらう子孫達へ。

まず、この世界に君が来たのは偶然だがそれはやるべき事が有るからだ。

私の場合は戦争を終わらせること。

君の場合はどうかは解らないがこれだけは言える。

この世界の厄災を止めなければ君は帰ることはできない。

私は役目を終えたので元の世界に返り、残りの人生を過ごす。

この世界に来た君が困らないように私はあるものを君に贈る。

それは私の全魔力で作り上げた使い魔と魔力と特性を飛躍的に上昇される魔道書だ。

この魔道書のおかげで私は厄災を止め、帰ることができた。

魔道書の名は『オシリス』使い魔の名は君が決めてくれ。

魔道書は右腕で持てば右腕に宿り君を助けてくれるだろ。使い魔も私の全魔力で作ったものだから心配は要らない。

君に一つだけ頼みがある。

どうか、この世界を守つて欲しい。

この世界はとても素晴らしい。

君もこの世界の素晴らしさが解る筈だ。

最後にもう一つだけ。

君に出来ない事は無いと信じなさい。

そうすれば不可能も可能になる筈だから。

以上、柏木順平より。』

柏木順平。俺の祖父であり「魔法の世界」に行つたことのある人。

俺は力プセルに目を移す。

確かに力プセルには本と使い魔らしき女性が居る。

「解つたぜ、爺さん。」

俺は拳で力プセルを叩き割る。

拳は血で染まつたが気にならない。

「この世界の厄災を俺が止めて、元の世界に返つてやるさ……」
こうして俺の異世界でやる事が決まった。

使い魔と魔道書と俺

俺は今、魔法学園「ウイザード・魔法学園」の校舎へと続く道を外れた所にある遺跡の地下で見つけたカプセルの下に書いてある文字を見て俺は決心した。

爺さんの言つ通りに厄災を止め、元の世界に返つて見せると。しかし、俺は此処である疑問が生まれた。

俺の爺様はもうボケてしまっているがまだ生きている。

でも、エアリスの話が本当なら戦争は500年も前に起きていたはずだ。

この世界と俺の居た世界の時間の進みは違うのか、はたまた爺さんが時間を越えて戻ったのかは今の俺には解らない。

それに、このカプセルもとつぶに調べられているのではないか？ 生徒ですら知つている遺跡の中にこんなのがあるんだ。

寧ろ調べないほうがおかしい。

暫く考え込んでいる俺の元へエアリスがやつてきた。エアリスはかなりびっくりした様子で言つ。

「へえ～。遺跡の中にこんなのがあるんですね～」

「え？ 知らなかつたの？」

嫌々おかしいだろ！

遺跡の階段を直進したらたどり着くところだぞ！

知らないのはおかしいんじゃないのか？

「遺跡の中は何も無いと先生たちが言つてましたから」

なるほど。教師が遺跡はあるが近づくなとか言つたんだろう。

「あ～。そのカプセルどうするんです？」

エアリスはカプセルへと目を移す。

カプセルの中には女性のようなシルエットの使い魔と『オシリス』

という名の魔道書が入っている。

「とりあえず開けないとな」

俺はエアリスにこのカプセルの開け方を聞いた。

おそらくは魔力か何かで開ける物だろうと俺は予想する。

しかし、今の俺は魔力の作り方？を知らない。

そこでエアリスに俺は聞いた。

「多分ですが・・・魔力を注ぎ込んで開けるタイプです」

やつぱりか、でもそれならエアリスに開けてもらえる。

俺はエアリスに開けてくれるよう頼んだ。

するとエアリスはカプセルに手を当て力をこめる。

その時俺は見た。

エアリスの周りに青い何かが蠢いているのを。

おそらくこれが魔力。

エアリスの魔法の特性は氷と水と言つていた。

なので魔力が青いのだろう。

エアリスが魔力をこめるとカプセルがいきよいよく割れた。

俺はとつさにエアリスをカプセルから遠ざける。

そして俺はカプセルの中にある『オシリス』の魔道書を右手で掴む。次の瞬間俺の頭にまたしても声が響く。

『今この瞬間より、汝と我は一心同体となる。我を手にするとはこの世界の厄災を止める運命を背負うことになるが汝は構わぬか？』

俺は迷わずこう答える。

「ああ、俺は必ず厄災を止めて元の世界に返つてやる
俺はそこで言葉を区切り、

「だから俺に力を貸せ！『オシリス』！！」

『了解した。これより我と汝は一心同体。汝が死ぬ時、我も死ぬ。

我が死ぬ時、汝も死ぬ』

『解った。俺とお前は一心同体だ』

『ここに我との契約が完遂した。汝の名を教える』

俺は大声で叫ぶ。

「俺の名は！・・・柏木俊介だ！」
かしわぎしゅんすけ

『汝、柏木俊介と我との間に契約が結ばれん』

そう言つた『オシリス』は俺の右腕に入り込み、右腕に紋章が浮かび上がる。

同時に俺の視界に変化があつた。

俺の視界の右側にマントを羽織つた得体の知れない何かがいる。

「おわああ！！なんだよお前！！」

エアリスは驚いている俺の指差すほうを見るが、エアリスには見えてないようだ。

俺に対してマントの何かは答える。

『まつたく、君はひどい奴だな、契約した魔道書のことをもう忘れるなんて』

マントの何かはやれやれといった感じで頭に手を当て頭を振る。

「お前・・・まさか『オシリス』なのか！？」

「えつ！？何かさつきと感じが違つ」

『あれはカツ』よさそうと思つたからあんな感じにしてただけだ』

何かがつかりしてるのは俺だけかな？

『それよりも俊介。早く使い魔の名を決めてやらねばお前のにはならんぞ』

「お・・おう」と俺は歯切れの悪い返事をして爺さんの残したもう一つのものに目をやる。

青い髪と青の瞳。歳は・・・12歳前後だから俺の五つしたか。

・・・までよ、これは爺さんが作つたんだろ？

だとしたら爺さんは・・・ロリコンだったのか！？

嫌だ！俺はこんな事実は知りたくないかった！！！

『俊介。今はそんなことで悩むときではない

確かに『オシリス』の言つ通りだな。

俺は12歳ほどの使い魔に話しかける。

「おい、大丈夫か？」

使い魔はのそつと起き上がり俺を見つめる。

そして一言。

「私と契約しろ。」「ミミ潤」

何か初対面の人？に罵倒された！！

俺は動搖を隠し切れないまま話を進める。

「け・・契約つてど、どうやるんだ？」

すると使いまではなく『オシリス』が答える。

『簡単だ。『お前の名前は～』といつてからキスをする。それだけだ』

「キッ・・・キスだと…？…　おいー俺の始めてを初対面にもかかわらず罵倒してくる少女に奉げると言つのか！？」

『そうだ』

嫌だ、俺の始めては初めて出来た彼女が良かつたのに。

畜生！恨むぜ爺さんよ～。

俺は使い魔に向き合つ。

ま、名前なんて呼びやすいので良いかな。

俺は一つ咳払いをして使い間を睨み付けながら、

『お前の名前は・・・ティア、ティア・ファミリアだ』

使い魔は俺の言つた名前を復唱する。

『ティア・ファミリア。ふむ、良い名だな。ゴミ屑・・・いや、ゴミ屑なマスターにしては良くやつた』

俺は内心では怒りを抑えながら考える。

くそ、何でこいつはこんなに罵倒ばっかするんだ？・・・まさか、爺さんは口リコンドドMだったのか！？

だとしたらこいつの口調は納得できる。

ようし、理由がわかれば我慢も出来る。

俺は決意を固め、いざ、ティアの唇を奪つ。

エアリスは恐ろしぐびっくりしていたが俺は気にしない。いや、気にしてたら恥ずかしくて死にそうだつたんだ。

肝心のティアの表情は・・・無表情！？・・・マジかよ。

俺はティアから離れた。

『フン、下手糞だな。まあいい。これで契約は完了だ。マスターよ

下手糞なのは初めてだからだよ！

ま、そんなことは置いといて、急がないとな。
こつして俺にはロリコンでドMな爺さんが残した遺産を持ってエア
リストと一緒に学校の校舎に向かった。

異世界での人生の分岐点（前書き）

今回も話の進展がないですが、我慢してください。

異世界での人生の分岐点

俺、柏木俊介はトラックに轢かれて気がつけば爺さんであり、ロリコンでドMの柏木順平が救つた世界に来ていた。

今は俺を看病してくれていたエアリスという名の少女と共に爺さんの残した『オシリス』って名前の魔道書と青い髪と眼を持つ12歳前後の少女であり、俺の使い魔であるティア・ファミリアと契約を果たしたところである。

俺の現在の目的はこの世界に訪れるらしき厄災を止め、元の世界に返ることだ。

ちなみに俺の視界にはマントの中に何かがある何かが俺の視界に映っている。

すると、俺の視線に気づいた『オシリス』がこう尋ねた。

『何か私に用かな？俊介』

俺は『オシリス』に思つてることを告げる。

「お前のマントの中身は何だ？まさか、ほんとにマントだけなのか？」

『いや、この中には人型の形をした身体が入つている。・・・俊介が望むなら人型の身体でいようか？』

俺にとつてはマントよりも人型のほうが話しやすいし・・・よし！

「ああ、頼む」

すると『オシリス』は『了解した』と言つて何かを唱える。

次の瞬間、『オシリス』はマントではなく長身で細身の男性へと姿を変えた。

『こんな感じでよろしいのかな？』

「ああ」と言つて俺は親指を立てる。

「あのー。さつきから独り言を言つてるとこひい申し訳ないんですけど・・・そろそろ先生達の所に行かないと」

おっと、うつかり忘れてる所だった。この後俺は魔法の特性を調べ

ないといけないんだつたな。

しかし、俺はどうやらエアリスに独り言を呴く変な人と思われてしまつた。正直に言うと悲しい。

「何だ、屑マスターよ、貴様はまだ魔法の特性を調べてなかつたのか」

俺はティアに脛を思いつきり蹴られて絶句する。

「なにすんだよ！お前は！！」

激怒する俺に対してティアはといふと。

「おい小娘。さつさと案内しろ」

エアリスに命令していた。

「おいティア！初対面の人に対する礼儀がなつてないぞ」

「仕方なかろう、先代のマスターがこの口調で喋るようこさせたんだ」

あの変体爺さんの所為だとは俺も薄々思つてたけどさ。

「それでも初対面の人に対する禮儀はどうなのさ！人として」

「残念なことに私は人型の『使い魔』なのでな、人間の礼儀など知らぬ」

こいつはマジで一発殴つてやるつかと俺は本気で悩んだ。

「まあまあ、礼儀については後で話すとして、さつさと行こうよ

エアリスは苦笑いをして、歩き始める。

くそう！何でこんなやさしい子が困る状況が存在するんだよ。

『まったく、そのことに関しては同感する』

「お前、俺の考えることが解るのか？」

『言つただろう。私とお前は一心同体だと。なのに君は声に出すか

ら変な人と思われるのだ』

それを最初から言えよ！

『すまんな、あまりにも君が馬鹿だったのでな
こいつもつぜえ。

暫く無言で歩いていたら校舎に着いた。

校舎の造りはレンガで出来ているようだ。

レンガで建物を造るつて事は、地震が起きないのか？

前にテレビか何かでそんなのを聞いた気がする。

校舎の造りはどこかヨーロッパの歴史的建築物を連想させる造りだった。

すると、校舎の入り口に教師らしき人物が数人立っている。その内の一人には見覚えがある。

エアリスの姉だ。

エアリスを大人の女性にしたらこうなるんだなと思わせる女性だ。

エアリスの姉は俺に向かって告げる。

「あれ？ 何か増えてないかな？」

俺は口をつぐんでしまう。

此處で「遺跡の地下で勇者の遺産を手に入れました」何ていつたら何をされるか解ったもんじやない。

『君の対処は正しいぞ、俊介。しかし、使い魔のほうは懸命な判断が出来るかは微妙だがな』

そう言って『オシリス』はティアを指差す。

俺もティアを見る。

「私はこの肩なマスターの使い魔だ。ついさっき遺跡の地下で契約をしてきたところだ」

この子は馬鹿ですか？

「おいティア！ 何で喋るんだよ、お前は」

俺達の会話を聞いて老人が話しかける。

「失礼。君はある力プセルのしたの文字が読めたのかね？」

黒いローブを纏っている老人だった。長い髪と髭は白くなつており、いかにも賢者のような人だ。

「あの、貴方は」

俺には大体の察しはついているが、此處で聞くのが礼儀というものだ。

「私の名はクルーガー・ワイズマン。御覧の通り、この学校の長じやよ」

やつぱり校長さんか。

「俺の名前は柏木俊介です。この世界には知らないうちに來ていたので、どうやって来たのかは解りません」

校長、クルーガーさんは柔和な笑みで俺に言つ。

「その事はもう知つているよ。そんなことよりも、君の特性を調べて入学に値するかを調べなくてわなんらん」

「え？ 入学……ですか？」

俺はちょっと驚きすぎて軽く放心状態になつた。

「君が特性で基準をクリアして、入学出来なければ不法入国及び不法侵入で国に突き出さねばならぬ。しかし、君が我が校の生徒であればこの件は黙認できるのじゃよ」

この人、すげえ優しい！！

俺は感動のあまり校長の手を握つて何度も振つた。

こうして俺は教師達に連れられて魔法の特性の検査を受けた。この学校の入学基準はどれか一つの魔法の種類が5ランクのうちの3ランクあれば大丈夫のようだ。

「落ち着いてないと結果が悪くなるかもよ」

エアリスの姉が俺にそんなことを言う。

寧ろそんなことを言うから緊張するんだと俺は思うよ。

検査は簡単。魔法の特性を調べてくれる魔道書『ミスター』に手を翳すだけ。

そうすれば後は『ミスター』が読んでくれるらしい。

俺は魔道諸『ミスター』に手を翳す。

すると、魔道書が光つた。

光った魔道書は機械的な口調で喋りだした。

『これより柏木俊介について基本情報の解析を始める。柏木俊介。

慎重172センチ、体重58キロ。生年月日は不明だが歳は16歳。

出身国・・・不明。』

そこで魔道書は言葉を区切る。

『続いて、基本魔法の特性検査を始める。・・・炎の特性0。水の特性0。氷の特性0。風の特性2。土の特性0。雷の特4。闇の特性1。光の特性0。』

おいおい、今のところ基準超えてないぞ俺！

『続いて、特殊魔法の特性検査に入る。・・・肉体強化の特性ランク外。空間魔法の特性ランク外。治癒の特性0。状態変化の特性0。』

『最後に所持している魔道具についての検査。・・・人型使い魔ランク外を一匹だけ所持。同化型魔道書、『オシリス』ランク外を一冊所持。以上』

これで検査は終わったみたいだけど、前半の評価は酷かったけど、雷で通つたみたいだ。

しかし、『ランク外』ってどうなんだろうか？

俺はエアリスの姉に聞いてみる。

「あの、『ランク外』ってなんですか？」

エアリスの姉は何か考えていたのか、反応が少し遅れた。

「『ランク外』とはランク5を超えていることよ」

つまり、俺は余裕で合格したというわけだ。

その後は普通だった。

書類と制服と街の地図をお貰った。

クラスとかは明日職員室に来たときに教えてもらうことになった。最後に俺の家なのだが、さすがに一人で暮らすのは許してはもらえなかつた。

そのことに俺は納得していたから別に反論なんかはしなかつた。結局俺の住む家はエアリスの家になつた。

理由は一つ有る。

一つ目、教師が居る。

「一つ目、同じ歳の子が居るからだそうだ。

エアリスト姉もそのことに反論はしなかつたことが俺には少しうれしかった。

帰る前に、今更だが自己紹介をすることになった。

「まずは、保護者のあたしからだね、あたしの名前はヴェーチェル・アンジエラス。エアリストの姉だ。得意魔法は風と治癒。よろしくね」

俺はヴェーチェルと握手をする。

「私の名前はエアリスト・アンジエラス……よろしく

俺はエアリストも握手をする。

「俺の名前は柏木俊介。こっちが使い間のティア・ファミリア。んで、俺の右腕に同化してるのが『オシリス』」

ティアは軽くお辞儀をする。

ティアがおとなしくしているのが俺には以外だった。

普段なら「よろしくな、肩共」とか言いそ�だから。

「さつさと帰つて」飯の用意をしましそう。今日から家族が増えたんだからさ」「

ヴェーチェルは笑つて歩いていく。

家族。俺にとつては結婚するまで体感することはなかつたであろううことだ。

こうして、俺には新しい家族が出来て異世界での一日は終わつた。

異世界での人生の分岐点（後書き）

ようやく。ようやく学園物になる兆しがきました。
キーワードに学園物とありながら話題の時点で学園要素がなしで
したが、
ついに学園物になりそうですね！

初めての学園生活その一（前書き）

今回から学園物になりました！
学園物が嫌いな方は申し訳ありませんが
暫く学園物が続きます。

初めての学園生活その1

異世界に来て一日目の朝。

俺、柏木俊介はエアリスとヴェーチェルの家に居候させてもらっている。

俺が貰つた部屋は東側に窓とベッドがあるので朝日が差し込んで目が覚める。

この部屋には基本的な家具はすべてそろつてるので今の所困つている事はない。

いや、一つだけ困つてることがある。

ベッドがもう一つ欲しいことだ。

現在この部屋にはベッドが一つしかないが、人と人型の少女が一人居る。

つまり、俺は青い髪と眼を持つ12歳前後の少女と一緒に寝ている状況に陥つてているわけである。

まずい、非常にまずいぞこの状況。

俺だつて一端の男子高校生。例えロリコンでなくともやばい。

『良いじゃないか。襲つても。彼女は君の使い魔だ。主の性欲の捌け口なつても文句は言わないだろ?』

そういうのは他人には見えず、俺の右腕と同化した魔道諸『オシリス』。

今は人型の身体をしているが、本当の姿は俺知らない。

あのなあー。別に俺は性欲がどうこうじゃなくて、やりすらいだけだ。

だ。

俺と『オシリス』は一心同体なので、心で喋れば会話が出来る。

『そりゃ、ならばティアをエアリスの部屋に預ければ良いだろ?』

『そりゃ! その手があつたな!!

俺が解決策を見つけたと同時に少女が入ってきた。

彼女の名はエアリス。黒髪のショートカットで、身長は平均ほど

優しくてあまり喋らない子だ。

「朝ごはんが出来ました」

俺は「了解」と一言言つてからティアを起こす。

「おい起きろティア。朝飯だつてよ

・・・・起きない。

俺は『オシリス』に助けを求める。

『簡単だ。命令すればいいだけだ』

命令。

「起きろティア。これは命令だ」

すると、パチッとティアの目が覚めた。

俺とティアとエアリスは階段を下りて朝食を食べる。

すると、台所からヴェーチエルがやってきた。

ヴェーチエルはエアリスの姉で、黒い髪は腰まで伸びていて、俺が通うことになった学校の教師である。

「いや～運が良いね君も。まさか転校してくるのが4月の終わりだから、まだクラスのこと馴染める筈だよ」

なるほど、今この世界は4月なのか、俺はそこで思い出したように左腕を見る。

腕時計は止まっていた。

壊れたのではなく、意図的に止まつていいようだった。

なんで止まつたのかは今は関係ないか。

こうして、朝を俺は迎えた。

暫く進んで止まる。

「しゅんすけ。こちらの人があ前のクラスの担任の先生だ。

「君は一樣あたしらの親戚扱いにしどくから」

ヴェーチエルは小声で話す。

暫く進んで止まる。

「しゅんすけ。こちらの人があ前のクラスの担任の先生だ」

俺の担任となる教師は・・・普通だ。

眼鏡をかけており、普通の服を着ている。

「ああ～。君が異世界からやつてきた子だね？」

教師は俺のことを知つてゐるようだ。

『私の名はイグニート・ヴァルカン。炎の使い手だ。よろしく』

「どうも』

俺と教師、イグニートは握手を交わす。

「さ、あんたはエアリスと同じクラスにしてもらつたんだから、このチャンスを逃さずに友達を作りなさいよ」

俺の背中をバンバン叩いてヴェーチェルは去つていった。
確かに、友達を作つておかないと魔法のことに関する解らない俺には大きな問題となる。

「さ、行こうか、かしわぎ君」

俺は先生と共に教室に向かつた。

高等部一年A組、此処が俺のクラスになるようだ。

先生に少し待つように言われた俺だが、何か忘れているような気がする。

『俊介。忘れているのはティアのことか？』

「ああ！－それだ！」

すっかり忘れていた。

でもあいつはどこに居るんだ？

『そこで君の特性を使うんだ』

俺の特性で探すのに使えるのなんであるのか？

『君は空間魔法は『ランク外』。ならばティアを思えば行けると思うぞ』

でも、俺には間寮の練り方とか知らないんだぜ？

『その為に私が居る。私が魔力の練り方を知つていれば、同化している君の知識として使えるはずだ』

俺は『オシリス』の言うとおりに記憶を探る。
ある。確かに魔力の練り方を俺は知つてゐる。

「よし、これでティアを探せる」

俺は目を閉じて魔力を練りながら、ティアを思い浮かべる。

次の瞬間。俺は廊下から消えた。

フツ。と、音が聞こえたかと思つと俺は移動していた。

「ここは・・・家じゃねえかよ」

そう、ここは俺達の家だった。

『寧ろこれはラッキーだ。知らないところよりはましだったな』

たしかに、これでさっさと帰れる。

ティアはすぐに見つかった。

寝ていたんだ。それも、朝飯を食つたテーブルで。

「こいつは・・・」

『落ち着け俊介。彼女は500年間も眠っていたのだ。いつもなら眠つていたからその所為だらう』

俺は落胆してしまつてた。

「で、こいつをどうする?」

『とにかく学校まで一緒に戻つてから決めよう』

こうして、俺はティアを連れて学校の廊下に帰つた。

俺が帰るとちよづき俺の紹介するときだつたよづだ。
もう少し遅れていたらどうなつてたか。

俺は教卓の横に立つ。

クラスの人数は40弱。多いほうのかもしねない。

俺は深呼吸してから自己紹介をする。

「始めてまして、柏木俊介です。自分はヴェーチエル先生と、そこにいるエアリスさんの親戚のものです。この抱えているのは自分の使い魔で、名前はティア・ファミリアと言います。よろしくお願ひします」

俺は自己紹介した後に一礼した。

すると、先生から得意な魔法とそのランクを言つてくださいと言わ
れた。

「得な魔法は、肉体強化と空間魔法です。ランクは共に『ランク外』
と言されました」

その瞬間クラスがざわめいた。

どうやら俺の言つたことが珍しかつたらしい。

なあ、『オシリス』。『ランク外』はそんなに珍しいのか？

『『ランク外』は一つ持つていればそれだけで異例なのに君は二つ
持つているんだ。このことが解るか？』

なるほど、簡単に言つと、チートコマンドを一つ持つていてのことか。
こひして俺の学校でピューの血口紹介が終わり、SHRは終わった。

次から授業か。

俺の学園生活一田田は初めてのことが沢山おきそつな予感がした。

初めての学園生活その一（後書き）

今回から暫くは、一つの話をパート分けにしてやってこります。

初めての学園生活その2（前書き）

まだ一日田が終わる予定はありません。
書きたいことが多いので、ご了承ください。
次で一日田は終わるかもしません。

初めての学園生活その2

一時間目前の俺の現状を紹介しよう。

- 1、先生の計らいでエアリスの隣の一一番端の後ろから一一番田の窓際という絶好のポジションを確保している。
- 2、その席でまた眠ってしまったティアを抱えている。
- 3、次の授業の準備をしようとしている。

そして最後に一つ。

クラスの視線が恐ろしく痛い！！

やめて！そんな「何あのダサイの〜」みたいな目で俺を見ないで！！

「おい！転校生。その娘は・・・お前の使い魔だっけ？」

そんな俺に後ろの席の奴が声をかけてきた。

声をかけてきたのは炎みた的な赤い髪と眼を持つているいかにも暑苦しそうな少年だった。

「えっと・・・君は？」

少年は「わいい。自己紹介がまだだつたな」と言って笑う。

少年はかなりのイケメンの部類だなと俺は思った。

俺の予想でしかないが、彼を見て何となく彼の魔法の特性は炎何じやと思う。

イケメンの少年は咳払いをして自己紹介を始める。

「俺の名前はブリツツ・メティオール。魔法の特性は雷と土だ。ランクは共に『4』だ。よろしくな、転校生」

違つた・・・特性は見た目で決まるんじゃないのか？

『当たり前だ俊介。特性はその人物の持つている魔力がどの魔法の何に向いているのかを調べるものだ。外見で決まるのなら君なんか闇が似合うと思うぞ』

確かに『オシリス』の言つ通りだ。

見た目で決まるのなら調べる必要はないのだから。

俺は自分の予想が外れたことに関してはもう考えるのをやめ、ブリ

ツツと握手をした。

これで俺に始めての『友人』が出来た。

その後の俺はエアリストとブリッツと色々なことを話した。

話をしている途中で俺は最初は気にしていた周りの視線だが、もう気にしてはいなかつた。

一時間目の中の授業の内容はまったく理解が出来なかつた。

この世界の歴史の授業なんて俺には解るはずがない。

何故かと言えば俺はこの世界の文字が読めないので、黒板に書かれる文字が解らないのだ。

しかし、俺は何故文字が読めないのに喋れるのかに疑問を感じる一時間目は終わつた。

二時間目から昼休みまでの間、俺は何故この世界の人と会話が出来るのかを考えていた。

どうやらここのことには『オシリス』も解らないようだ。

途中、エアリストが授業を聞かなくても良いのかと聞いてきたのだが、生憎だが俺には魔道書があるので必要な知識は『オシリス』の中にあるから大丈夫だと伝えておいた。

そんなこんなで昼休み。

俺はエアリストブリッツと共に食堂に向かつた。

食堂に向かう廊下で俺たちは変な二人組みに出会つた。

「『きげんよう。凡人の皆様。これからどちらに行く気かしら~?』」滅多に聞くことはないであろうお嬢様言葉を使う少女と、

「やめなよオプジティアン。こんな凡人どもと喋つていたら高貴な僕たちの血が穢れかねないだろ?」「僕たちの血が穢れかねないだろ?」

今度は一発殴れば「ママに言い付けてやる~」とか言って泣いて帰

りそうな奴が喋る。

それにもしても、さつきから凡人、凡人つて、何様のつもりだよ。

「退いてくれよ二人とも。俺たちはこれから食堂に転校生を案内しないといけないんだよ」

ブリツツが何だか喧嘩腰の声で言つ。

仲でも悪いのだろうか？

「まあ！この凡人つたら、貴族であり士と闇のランク『5』であるこのオプジティアン・アップグルントに命令するのですか？」

カールしている金髪。きれいな青い瞳をもつオプ何とかはオーバーリアクションすぎる大げさな声で驚く。

「おいおい凡人。同じく貴族で水と光のランク『5』の僕、カルティナ・ファウンテンに命令するのかい？」

今度は栗色のショートヘアで琥珀色の瞳を持つ少年、名前は・・・泣き虫で良いか。

が、またもやオーバーリアクションをする。

それにもしてもこの二人、うるさいし、いちいち上から目線だし、確かにブリツツが嫌うのも解る。

しかもこの二人はまだ何かを喋つてているようで周りの人達からいやな目で見られている。

ここで俺は何と言えば良いだろう？

『君の思う最適な言葉を言えば良いんじゃないのか？』

最適な言葉が見つからないから苦労してんだろうが。

『どうやら彼らは自分達が貴族でランクが高いから我が物顔のようだな』

だから何だよ。

『ならば簡単だ。君がランク『外』だと言えば彼らは立ち去るのかも知れんぞ？』

そうか！その手があるんだな。

俺は邪魔な彼らに何を言つたかを決めたのでブリツツの肩を持つて前に出る。

「おい！何すんだよ転校生！」

ブリツツが俺に文句があるのか、はたまたこんな奴らに俺を閑わらせたくない良心なのかは解らないが、ブリツツが俺に叫ぶ。

「まあ落ち着けよブリッジ。それにお前らも」

「10秒待つ。10秒以内に此処を退かないのならお前達を校庭に

移動させる

二人の貴族は何を言つてゐるんだ? という顔をしていた。

まして彼らは最高ランクの特性を持つているのだから当然退くわけがない。

「ハーフ一〇秒はある」という間に過ぎた。

『場所は校庭で良いのか？何なら大空という選択肢もあるぞ？』

それは死にかねないからやめておく

「了解した。いつでも良いぞ」

俺は目を閉じて『アシリフ』の記憶を探して魔力の絆の方を探す見つかつた。

俺が魔力を練りだすと同時に右腕も光る。

多分『オシリス』か起動しているからだろう。

直後、フツと音を立てて一人は消えた。

周りの人間ばざわざわと何かを喋るが俺はそんなのを気にしない。

「なあ、早く食堂に行かねば」

一人はまだ納得していないような顔で歩き出す。

俺は一人の後ろに付いて行つた

初めての学園生活その2（後書き）

書くことがなくなつてきました。

それよりも誰か読んでるのかも不安です。

また今回は主人公の空間魔法は相手も移動させることが出来ないことにしています。

この力は反則かもしませんが、それでもないです。自分の知っている所にしか移動させれないからです。

この辺のバランスが難しいです。

ではまた次話を見てくれることを祈っています。

最後になりましたが、新年明けましておめでとうございます！

初めての園芸生活の感想(前編)

ついに終りましたでした。
このなまこ。

初めての学園生活その3

結局、俺はエアリスとブリッツの一人にあの貴族をどうやって消したのかを説明することになつていて。

俺達が今居るのは学校の食堂。

食堂つていうよりはレストランに近い。

ウェイトレス達が忙しそうに学生達のオーダーを聞いて走り回っている状況だ。

俺の隣にブリッツ。反対側にエアリスが座つていて。

「まず、お前に話を聞く前にメシでも食わないか？」

ブリッツは余程腹が空いているのか、今すぐにもテーブルの端にあるコールボタンを押しそうな勢いだった。

そこにエアリスが「決めてる最中だから待ちなさいよ」とブリッツを押しとどめる。

俺ブリッツからメニューを貰つたところで重大なことに気づく。

「あっ――！」

突然の叫びに一人と学生とウェイトレスが驚く。

「どうしたんだよ転校生。急に叫びだして」

ブリッツが俺に話しかける。

俺はブリッツとエアリスにあることを話す。

「ティアを教室に置いてきた」

そのことに一人も驚きを隠せず口を開けている。

『別に構わんだろう？命令で呼べば良いだけの事だ』

『どうやって？と俺は『オシリス』に質問する。

『アレは君の使い魔だ。君が心で呼べば、君の魔力を探して此処に来る』

本当か？でも、此処の学生は全員魔法使いだぜ？特定の魔力だけを感知できるのか？

『君はランク『外』の魔力だ。見つけるのは容易い』

俺は深呼吸をしてティアに向かって心で呼ぶ。

此処に来い。

すると、俺の膝の上が光りだした。

「おい転校生！今度は何やつたんだよー！」

ブリッツは椅子から転げ落ちた。

「知るか！おい『オシリス』…これは何だー？」

『これは使い魔の良く使う転移魔法だ』

転移？じゃあ此処にティアが来るのか？

『そういうことだ。しかし、不味いな』

何が不味いんだよ？

俺の質問に『オシリス』は答えにいくのか口を噤む。しかし、ついに質問に答えた。

『普通使い魔は動物だ。だから転移は別に問題は起きない。しかし、アレは人型だから服を着ているのが問題だ』

なんでだよ。

『転移は使い魔を飛ばす。つまり、服は教室に残る』

その言葉に俺は全身が震えるのを感じた。

直後、素っ裸のティアが俺の膝の上に座る。

俺は一目散に食堂を走り去った。

目的場所は教室だ。

何とかティアの服を探し出せた俺は、昼飯を食おうとするトチャイムが鳴った。

こんなの、理不尽すぎるだろおおおーー！

俺は教室の床に蹲り拳を床に叩きつける。

すると、床がバコオと音を立てて崩れ落ちた。

「へ？」

俺は何とも間抜けな声を出して下の教室に落ちた。

落ちる瞬間に『オシリス』がこんな事を言つてきた。

『君が無意識に肉体強化の魔法を使つたようだな』

俺は無意識に使つてしまつた魔法で下の教室に落ちた。

初めての学園生活その3（後書き）

いつも、誰かが読んでいることを願いながら書いています。
更新できなかつたのは受験勉強の影響でした。
これからもなるべく更新していきたいです。
それでは、また次回。

初めての学校生活その4（前書き）

最初に謝ります。すいませんでした。
気づいた人も居ると思いますが、

前話でのタイトルを間違えていました。
久しぶりの投稿で間違えていたのです。
訂正しましたが、おや？と思った方。
別に何の伏線でもありません。

ただのミスでした。

申し訳ありませんでした。

初めての学校生活その4

俺は無意識に使つてしまつた魔法の所為で教室の床を殴り壊し、現在は下の階の教室に居る。

激しい痛みは・・・無い。

周囲には瓦礫が落ちているのだろう。

ガラガラと硬いものが落ちる音が聞こえる。

粉塵の所為で周りが見えない。

手探りで周りに手をやると何かに当たった。

柔らかい感触。

俺にはこれが何なのか解る。

これは・・・胸だ。

それもなかなかの大きさだ。

この世界に来る前の俺は達也たつやと一緒に胸について一夜を語り明かしたほどのマニアだった。

でも、まさかこんな所で揉めるだなんて、最高すぎる。

俺は胸に当たつた手を離してグッと握る。

すると、粉塵が消えて俺が揉んだ胸の主の顔が見える
その顔には見覚えがあつた。

今は氣絶しているようだが俺はこの人物を知っている。

そう、あれは食堂に行く途中。

つて、何だ、オブ何とかかよ。

俺ががつかりした調子の声で言つとオブ何とかがいきなり目を開けて俺の耳元で怒鳴る。

「王の騎士団の団長である貴族の娘である私、オブジティアン・アップグルントに向かつて何と無礼な言葉を使うのですかこの凡人は

！」

こんな正確でなければそれ相応にモテそつなのに、損しているなこいつは。

「はいはい、悪うございましたね」

俺は適当な調子で答える。

すると教室のドアが開いて少年が出てくる。

「大丈夫かい？ オプジティアン！？」

「出たよ、泣き虫君が。

俺は駆けつけてきた泣き虫にこいつは大丈夫だと伝えた。

「黙りたまえ凡人。君の言葉を僕は信じない。僕は自分の目でオプジティアンが無事かを確認する」

こいつ・・・人がせつかく親切に言つたのによ。

あれ？ そういうえば、泣き虫が着てから教室に人が居なくなってる気が・・・

「なあ、お前何かやつたのか？」

俺は泣き虫に質問する。

「僕が？ 誰に、何を？」

俺は泣き虫の質問にきちんと答える。

「お前が、教室の人間に、此処から居なくなるような何かを」

その瞬間、泣き虫がピクリと反応する。

「君は僕を馬鹿にしたいのかい？」

「寧ろ、今の発言のどこに馬鹿にした要素があるのかを教えて欲しいくらいだよ」

だつて俺はきちんと答えたに過ぎないんだから。

「解った、そこまで馬鹿にしたんだ、責任を取つてもうつ」

「責任？」

まさか、死ぬとかそん何無しだぞ！？

俺の思う責任とは違う言葉が泣き虫から出た。

「僕と決闘だ」

「決闘・・・何の？」

『決闘とは、魔法を使っての勝負のことだ』

教えてくれてありがとさん。

一対一なら負ける気がしないから断る理由も無いが。

決闘を受けようとした俺にオプ何とかが声を掛ける。

「お待ちなさい、この決闘。私も参加します」

「何でお前までもが！？」

「おいおい、一対一なら負けるかも。

「勿論、貴方も誰か一人を仲間にしても良いですわ」と一言言つて二人は教室から出て行つた。

此処はお前の教室じゃあねえのかよ。

自分の教室に戻った俺はブリッツとエアリスト今日の放課後に決闘することになったことを伝えた。

相手は泣き虫とオプ何とか。

三人で話し合つた結果、俺の仲間はティアに決まった。

「頼むティア。決闘に参加してくれ」

俺はティアに頼みこんだ。

答えはYES。

当然だろうな。俺の使い魔だし。

こうして決闘することになつた俺はどう戦うのかを『オシリス』とティアと話し合つことにした。

初めての学校生活その4（後書き）

次からはいよいよ魔法対決です。
では、また次回。

初めての学生生活その5（前書き）

一冊が終わる気がしません。
すいませんがもう暫く待ってください。

初めての学生生活その5

学校生活初日の放課後。

俺はこの世界に始めて来た時に倒れていた校庭にティアとエアリスとブリッツと共に来ていた。

此處に来たのは馬鹿にされたとか言つてきた貴族一人とティアと共に決闘するためだ。

「よく逃げ出さずに来た事は褒めてあげるよ、凡人」と、俺に決闘を申し込んできた短髪で茶髪、琥珀色の瞳を持つ少年。名前はまだ知らないが見た目から俺は泣き虫と呼んでいる。そしてその泣き虫の横で仁王立ちしているのはカールしている綺麗な金髪と青い瞳を持つ（かなり胸が大きい）少女。名前はオプ何とかだ。

この二人は貴族らしくて我が物顔でここで学校生活を送つてゐるようで周りの生徒からも嫌われているようだ。

ま、そんなことは俺には関係の無いことだ。

「で、決闘の勝敗はどうやって決めるんだ？」

俺が泣き虫に質問する。

すると泣き虫は前髪を払つて偉そうに言つ。

「簡単なことさ。参つたと言えばそれで終わりだ」

何だ、用は普通の喧嘩と同じか。

「但し、敗者には罰が与えられる」

そこで泣き虫は言葉を区切る。

「罰・・・ね。で、その罰つて一体何をやれやあ良いんだ？」

と、今度は泣き虫では無くオプ何とかが話す。

「敗者が勝者の言つことを何でも一つ聞く」

二人の貴族は満面の笑みを浮かべている。

こんな事を言つて事は、じつ等は勝つのが前提のようだな。

『そのようだな』

俺の心の弦に對し細身で長身の大型でいる魔道書『オシリス』が
答える。

でも、負けることも考へないで良いのかよ？

『彼等は自分達が貴族であり、尚且つ天才だから負ける理由が見つ
からんのだろ？』

でも、昼休みのときに俺に飛ばされただろう？

俺は昼休みのときにこの一人を校庭に飛ばしたことがある。
これも決闘の理由の一つだろう。

『アレは油断していたからだと考へているのかも知れんな
なるほどね。』

俺が『オシリス』との会話が終わった頃にブリッツが俺達の真ん中
に歩いてきた。

「これより決闘を始める」

ブリッツが腕を正面に突き出す。

「負けんなよ。転校生」

ブリッツが俺にワインクをする。

「ああ、任せとけ」

俺もブリッツにワインクは・・・しなかつたが気持ちは伝わったと
思つ。

直後、ブリッツの腕が上げられた。

「始め！！」

こうして決闘が始まる。

まず始めに動いたのは泣き虫だった。

泣き虫は掌を俺の方に突き出すと白い液体が飛んできた。

俺はそれを難なく交わす筈だった。

ガチリ。と足元の土が俺の脚を飲み込んでいた。

これは・・・マズイ気がする。

俺は泣き虫の後ろに居たオプ何とかを見る。

あいつの魔法が俺の脚を止めてるのか！

白い液体はもう俺の目前まで迫つてゐる。

やばっ！

俺は目を閉じる。

しかし、痛みは感じられない。

俺は恐る恐る目を開けた。

するとそこには・・・青い髪を持つ少女ティアが白い液体を片手で受け止めていた。

「ティア・・・お前」

ティアは後ろを振り返る。

「安心しろマスター。私はすべての魔法ある程度操れる。それにそこでティアは言葉を区切る。

「私の特性は水。貴様の高水圧のカッター等効くわけも無からうが！」

そう言ってティアは水のカッターを掌に集めて一つの剣を作った。

「さあ、何をしているマスター。楽しいダンスの時間だぞ？」

俺は空間移動で埋まつた脚をリセットする。

「ああそうだな・・・反撃の時間だ」

俺達は一斉に泣き虫に向かって走り出す。

「う・・うあああああ！」

泣き虫は水の塊を投げる。

しかし、ティアはこれを先ほど作った水の剣で難無く切り裂く。

その隙に俺は肉体強化の魔法で強化した拳を泣き虫の顔面に叩き込む。

ドッゴオン！と轟音が鳴る。

泣き虫は10メートル程ノーバウンドで吹っ飛んでオプ何とかの足元で気絶した。

「ひつ」

オプ何とかは足を竦ませ、小さな悲鳴を上げる。

なんだかなあ。ああいつのをやられると殴りにくくなるんだよな。実際俺は女人の人を殴った経験は無い。

だから、此処は殴らずに解決したいのが俺の本音だ。

そこで俺はこう言った。

「なあ、負けを認めてくれないか？」

オブ何とかは小さな声で「貴族の誇りに掛けても負けを認めるのはとか言つてゐる。

ティアは「『イツ殴つて帰るか？』的な田線をこいつに送つてくるし。

悩んでいる俺の後ろに何かが落ちてきた。

ドシン！と音を立てて大きな岩が落ちてきた。

「何だ？・・・アレ」

俺が近づこうすると、

岩が割れて中から化物が出てきた。

全身を岩で包まれている竜とも犬とも思える姿。

不気味に口から黒い煙を吐くその生き物は俺達に向かつて襲い掛かつて來た。

直後、俺は自分の横腹に噛み付かれるのに気がつくのに数秒掛かった。そこで俺の意識は途絶えた。

初めての学生生活その5（後書き）

今回は魔法の戦いをあまり詳しく掛けませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8518z/>

【別世界】アナザーワールド

2012年1月10日16時00分発行